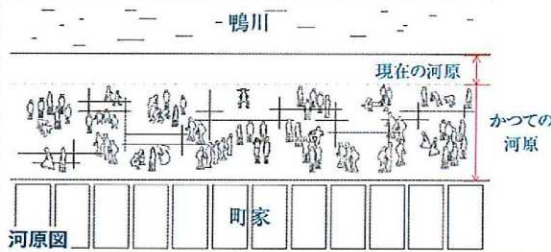




群雲テラスとは

河原の空間[Kyotoが生成する場]

市が立ち、歌舞伎が生まれ、物の交換や芸能、新しいものが生まれる場(都市が生まれる場)



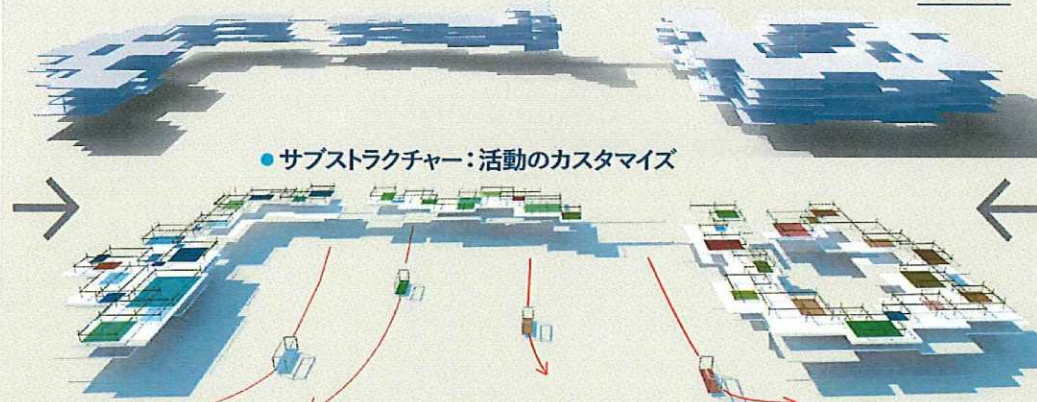
かつて鴨川の河原は文化を生み出すバイタリティーに満ちていた

流れをつくる

- 機能进行分析し、全体を適切な規模の集合体として構成
- 各ユニットは、ずれながらつながり、敷地全体に流れをつくり出す

新しい文化&新しい京都を生み出すキャンパス

- メインストラクチャー：活動のプラットフォーム

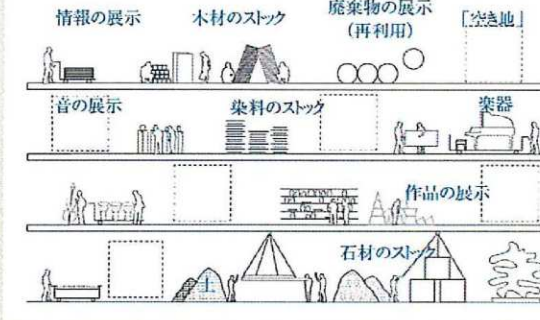


- サブストラクチャー：活動のカスタマイズ

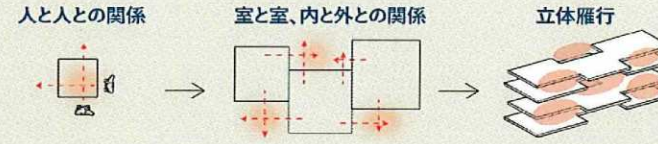
- モバイルストラクチャー：活動の拡張(外への展開)

かつて河原が持っていたワイルドな都市性を芸術学校という形で再興する

モノが流動する場

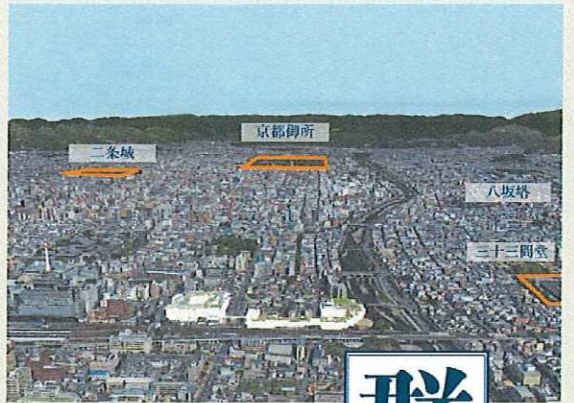


「都市の棚」：マテリアル～作品～廃棄物の流動



雁行はコミュニケーションを生み出す

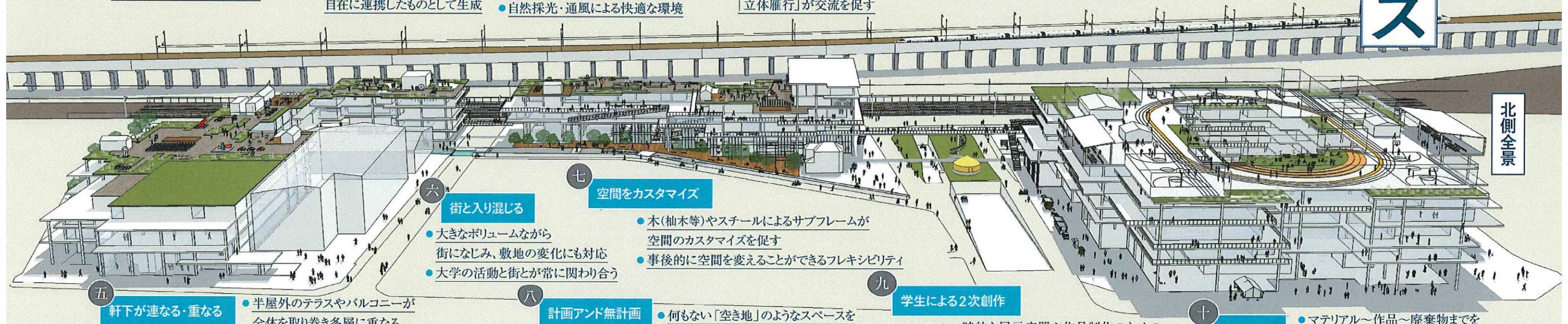
1200年の京都



群雲

CLOUD TERRACE

テラス



北側全景

五 軒下が連なる・重なる

- 半屋外のテラスやバルコニーが全体を取り巻き多層に重なる

六 街と入り混じる

- 大きなボリュームながら街になじみ、敷地の変化にも対応
- 大学の活動と街とが常に関わり合う

七 空間をカスタマイズ

- 木(杉木等)やスチールによるサブフレームが空間のカスタマイズを促す
- 事後的に空間を変えることができるフレキシビリティ

八 計画アンド無計画

- 何も無い「空き地」のようなスペースを点在させることで拡張可能性を開く

九 学生による2次創作

- 一時的な展示空間や作品制作のための補助的改変を許容する

十 都市の棚

- マテリアル～作品～廃棄物までを可視化し、展示&再資源化する

大学を社会資源化する

京都市立芸術大学新機構

大学を社会資源化するための4つの観点

- 1 京都の未来の創造→革新的な表現を可能にするための歴史的資料の活用
- 2 地域未来の創造→地域住民に対する生涯STEAM学習教育(science, technology, engineering, art, maths)
- 3 大学の未来の創造→教育・研究の場として国際化
- 4 表現者の未来の創造→デジタル化する表現活動の発展を目指した文理融合の教育・研究

なに?

- マネジメント
コアパスの創造的運用
- リサーチ
コアパスを活用した調査・研究
- キュレーション
芸術・研究を社会に発信
- プロジェクト
外部資金を活用した実験
- エンゲージメント
地域・社会・産業との連携

メディアリサーチ機能
京都市立芸術大学の価値を創出・発信・維持するための新機能

なぜ?

- 生きる資料館
知財に配慮したデータ運用
- デジタル工作機械
美術・音楽学部のコラボ
- 多様な成果発表の場
美術・音楽学部のコラボ
- 移動する大学
京都市をキャンパスとする
- 自由空間としてのミチ
大学敷地内の公「共」化

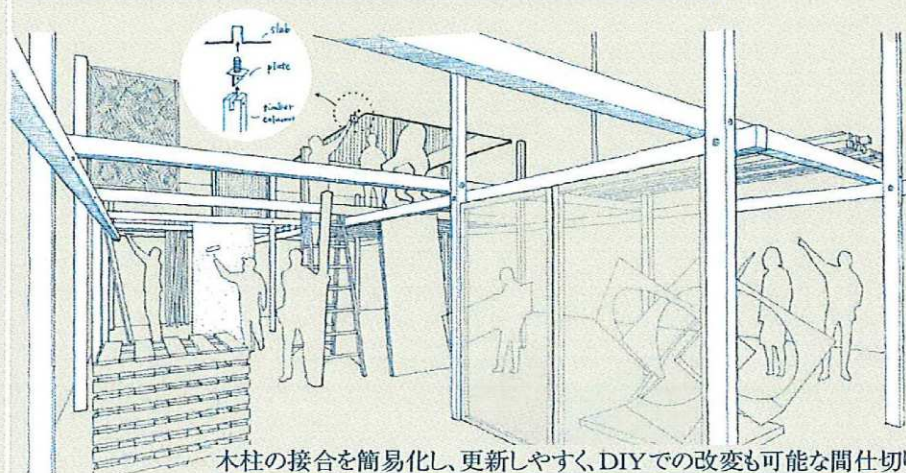
大学の社会資源化
デジタル化・移動性・多様な人々の包摂を通じた社会資源としての大学の創出

どう?

- アーカイブラボ
過去作品の創造的活用
- ファブラボ
ラーニングコモンズと一体化
- パフォーマンスラボ
展示やワークショップにも対応
- モバイルラボ
学内外での仮設展示・研修
- ストリートラボ
中庭での地域連携活動の促進

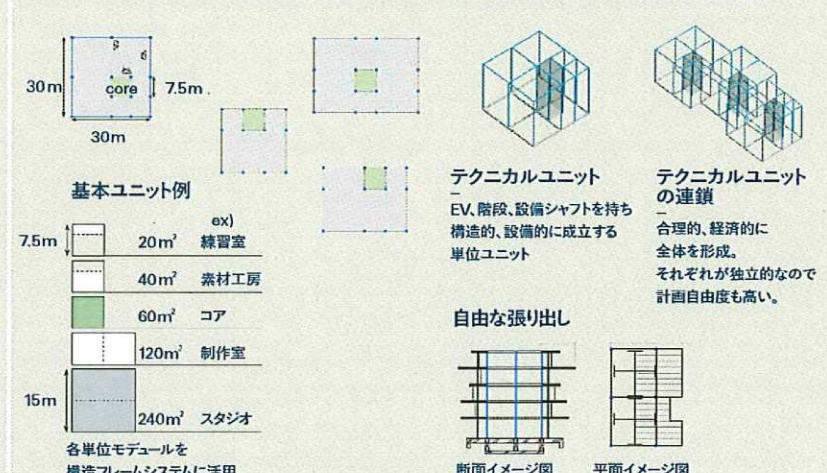
開かれたラボの設立
様々な実験を許容し、緩やかな文化的紐帯を京都に生成

サブストラクチャー[空間をカスタマイズするシステム]



木柱の接合を簡易化し、更新しやすく、DIYでの改変も可能な間仕切り

クラウドストラクチャー[余白をつくる自在な構造システム]



基本ユニット例

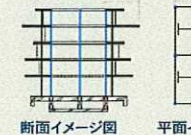
- 20m² 練習室
- 40m² 素材工房
- 60m² コア
- 120m² 制作室
- 240m² スタジオ

各単位モジュールを構造フレームシステムに活用

テクニカルユニットの連鎖

EV、階段、設備シャフトを持ち構造的、設備的に成立する単位ユニット

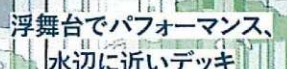
自由な張り出し



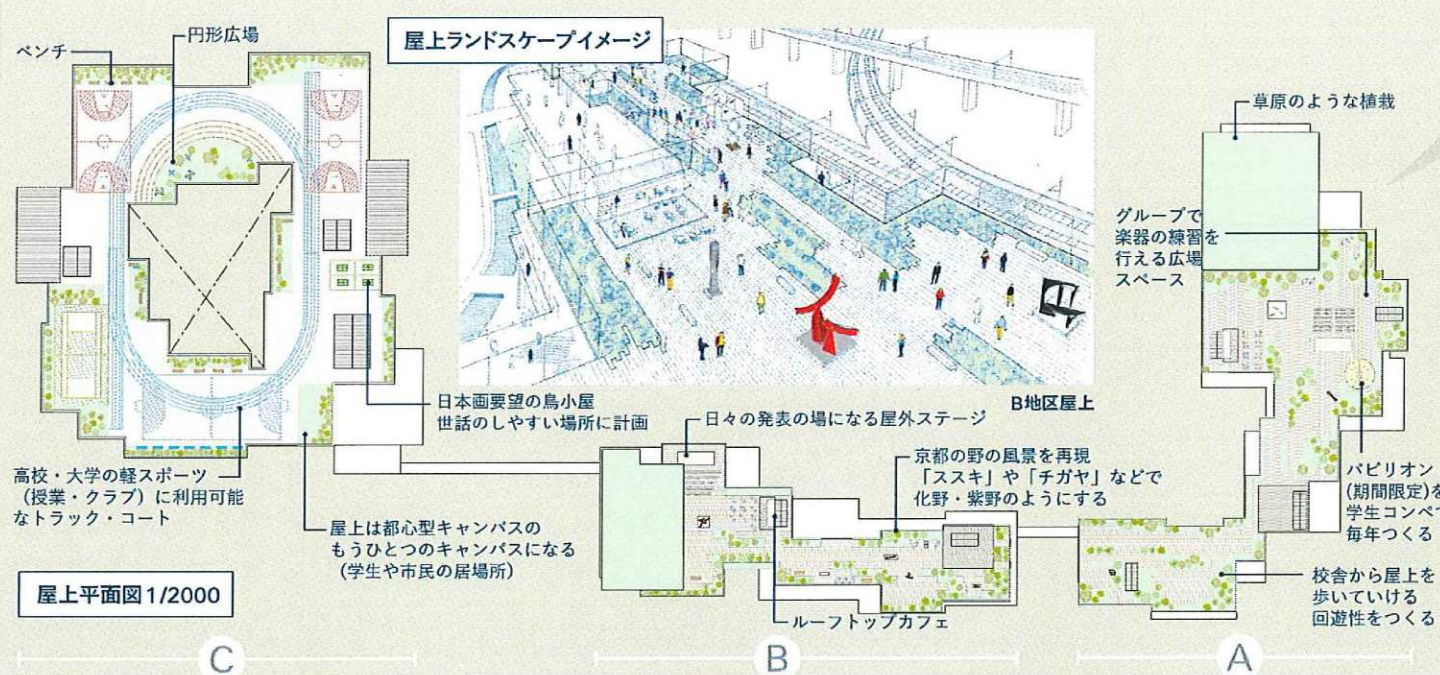
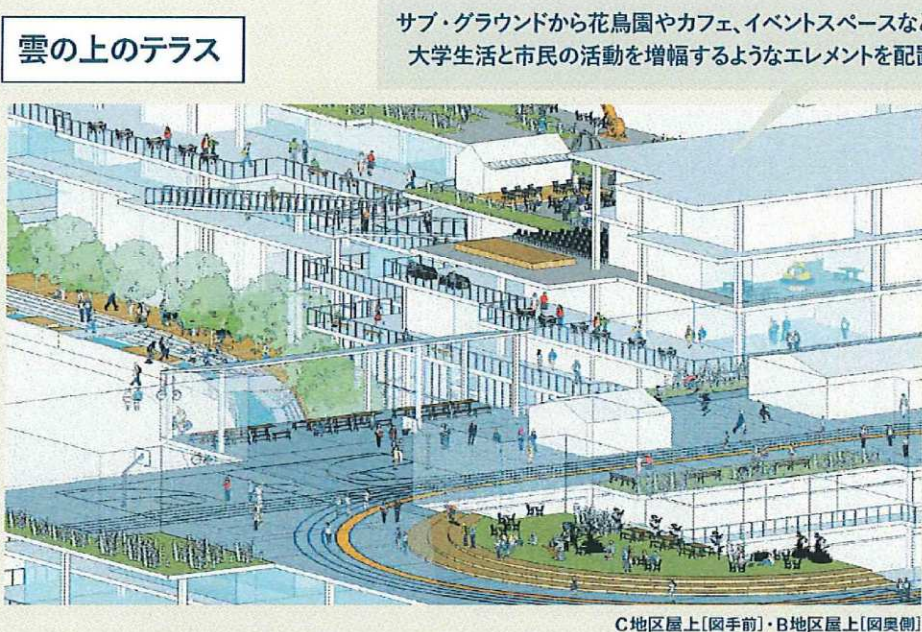
テクニカルユニットの連鎖

合理的、経済的に全体を形成。それぞれが独立なので計画自由度も高い。









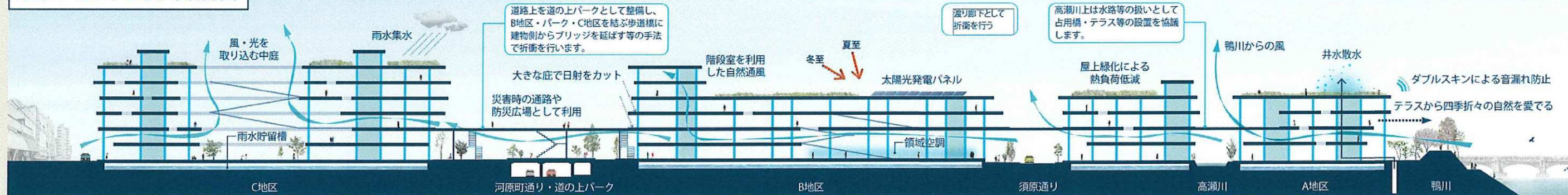
東山から北山にかけての眺望や駅南の風景など最上階は、京都を俯瞰できるライン状の公園となります。

また資材保留場所を設定し、アートに使う資材を点在させることで、美術大学の「モノの循環」を展示します。

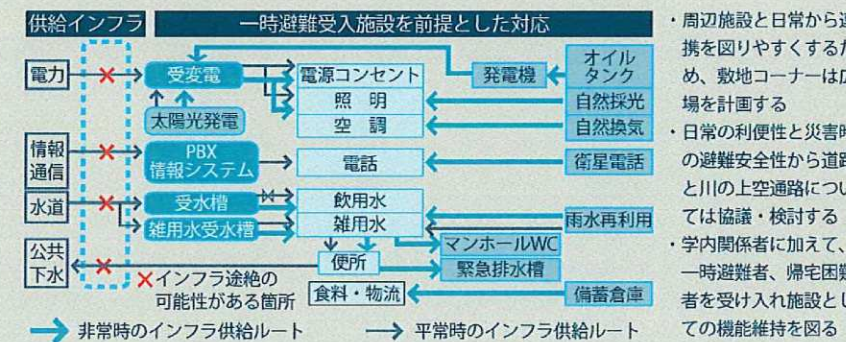
樹木は土壌が重量過大となるためスキヤチガヤ、その他の草などを使った「草原」のような植栽を計画します。化野とか紫野のような、京都の野の風景を再現し重さへの配慮と、自然な見え方を両立させます。

室外機は分散配置としてエキスパンドメタルなどで囲い、大きなファニチャーのような扱いにして雲の上テラスに馴染ませます。

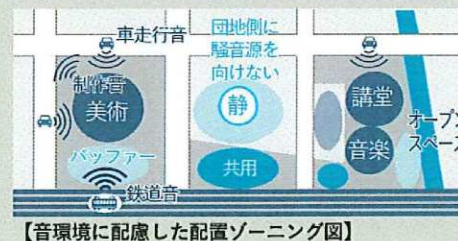
未来の100年を想う環境計画



地域防災とキャンパス防災を確立し、災害に万全に備える

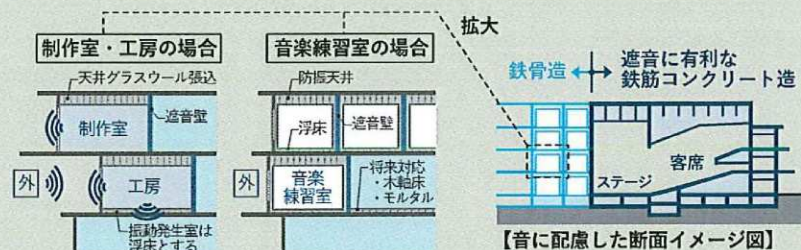


サイトマネジメントで音環境を考える



- 周辺との離隔を十分に確保し、美術と音楽を明確にする配置計画により、音環境(騒音)に配慮します。
- 鉄道沿いで静かな環境を必要とする室は、ダブルスキン(二重サッシ)で約30dB騒音減衰させ、良好な音環境を創り出します。

音源・振動源を浮かす=躯体と床・天井の縁を切る



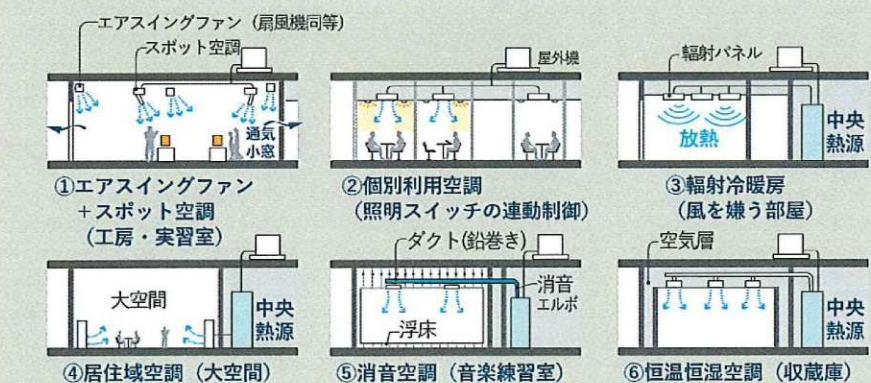
- 機器振動のある室や音楽練習室などは、上下階間、隣室間で浮床構造(150mmの床下げ)と遮音壁とします。
- 将来対応が必要と思われる範囲を想定し、躯体対応を行い、木軸床などでフレキシブルに床のかさ上げを行います。

自然通風を取り込む雁行プラン

- 雁行したテラスやピロティが鴨川沿いに流れる中間期(南東)の風を有効に取り込み、空調がなくても居心地のよいエコキャンパスを実現します。



部屋用途に適応したベストミックス空調



- 部屋と廊下の間に換気小窓を設置し、階段を利用した温度差煙突効果で全館に風の流れをつくります。
- エアスイングファンやスポット空調による出入りが多い工房などから、細かな温湿度コントロールが必要な収蔵庫・展示室などで、適材適所の空調方式を採用することで徹底した省エネ化を図ります。



群雲・つかうチーム [ソフト設計]



[スキーム構築] 広瀬郁 | トーンアンドマター



[サイン・メディア] neucitora | 代表: 刈谷悠三



[デザインリサーチ] 水野大二郎



[ランドスケープ] 石川初



[ランドスケープ] 戸田芳樹風景計画



群雲・つくるチーム [建築設計]



kwhgアーキテクト



タトアーキテクト | 代表: 島田陽 [京都芸大出身]



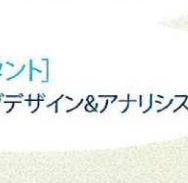
ツバメアーキテクト



[劇場設計] シアターワークショップ



[音響設計] 永田音響設計



[照明コンサルタント] サワダライティングデザイン&アナリシス



群雲・全体統括 [つくる・つかうチームの全体統括]



安井建築設計事務所



東京事務所 計画の推進・マネジメント



大阪事務所 京都市・まちとの協議調整



工事監理チーム 工程・仮設計画



都市デザインチーム 都市計画・ブリッジ協議など



コストVEチーム 概算・分析



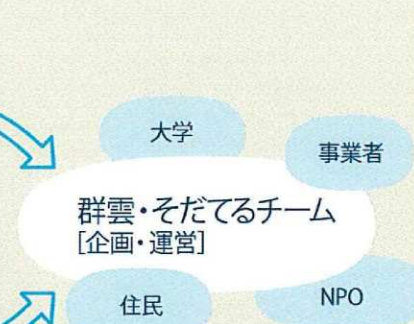
チェック連携



CMチーム 吹田サテライト スタジオ

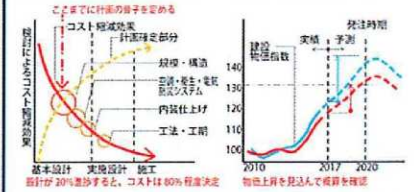


竣工後



設計に関わっていたメンバーが竣工後も継続的に大学に残り企画・運営を行う

[図B] コストコントロールとコスト予測



[図A] BIMコスト 概算への活用



実施体制

●多様な実績のメンバーによる三層構成

多様な実績を持つ東西のアトリエ事務所を中心とした“群雲・つくるチーム”と、空間運営のスペシャリストたちを集めたソフト設計担当“群雲・つかうチーム”、さらに組織事務所が全体統括として入ります。

●京都サテライトオフィス

現京芸キャンパス内、もしくは、市内などに京都サテライトオフィスを構え、教員や地域住民の声を聞いて行きます。また京都サテライトオフィスは竣工後には、企画・運営などを行う“群雲・そだてるチーム”として大学に残り、キャンパスに活力を与え、持続的に建物に関わって行きます。[6ページ目参照]

業務の進めかた

●常に先を見据えたプロジェクトマネジメント

プロジェクトの事業骨格を方向づける重要な基本設計フェーズに注力し、つくるチーム+つかうチームを中心に、WSなどを通じて大学、学生、地域、行政などと協働してプロジェクトを進めます。

コスト・スケジュール・品質コントロール

コスト・スケジュール・品質コントロールは全体統括の安井建築設計事務所が行います。設計チーム“群雲・つくるチーム”と並列に“CMチーム(安井建築設計事務所/マネジメントビジネス部門)”を置き、第三者の目でコスト・スケジュール・品質のチェックを行います。

ル・品質のチェックを行います。

A——コストコントロール

①スケルトンボリュームとエレメントのチェック | 規模、構造形式など、イニシャルコストの骨格を担うアイテムの比較検討とチェックを計画初期段階から繰り返します。概算コストの算出にはBIM設計データを用いることで従来よりも格段にスピーディなスタディが可能です。(BIM: Building Information Modeling)[図A]

②ランニングコストのチェック | 光熱水費・清掃費・修繕維持管理費などの算出根拠から、竣工後も事業負担のかからないシステム運営の検討とチェックを行います。

③仕上材のチェック | 利用勝手・長寿命化・可変性の観点から、部位ごとのもっともふさわしいコストパフォーマンスの材料選定を行います。

④ライフサイクルコスト | ①-③を合わせてもっとも合理的な生涯コストパフォーマンスへ導きます。また、長期修繕計画を作成し、資産価値の維持・向上を行います。

⑤つくるチーム+つかうチーム+CMチーム

により“VE委員会”を立ち上げ、基本設計①、②の終盤に総合的視点で品質と機能を確認しながら、コスト低減プロセスを実施します。

⑥安井建築設計事務所のコスト専門部門が長年の経験と蓄積をもとに資材や労務費変動による建築市況を分析・予測し、現実的かつ適正な建設コストを提示します。[図B]

B——スケジュールコントロール

“群雲はこうして実現する”のシート参照

①長・中・短期スケジュールコントロール | “群雲・つくるチーム”の管理技術者は、全体、3か月、1か月単位のスケジュールを把握し、それぞれの参加役割や時期を明確に、最も効果的な意見集約と方針決定が可能な状態を維持します。[図C]

②長・中・短期的課題の解決 | 課題項目や本質を一覧に整理し、スケジュールの進捗予定と合わせてタイムリーに解決を図ります。解決に当たっては、それぞれのミーティングの機会を活用することで解決のプロセスも共有します。[図D]

③クリティカルポイントの設定 | 設計の段階的アウ

トプットの時期(クリティカルポイント)を定め、それに向かってWSや相互連携ミーティングを実施します。

④発注者・ユーザー・WSでの設計と条件・要望・意見などを一元管理し、成果品(アウトプット)へ着実に展開します。

C——品質コントロール

①将来の利用勝手や長年の間にフレキシブルに成長する予測を踏まえ、スケルトン・インフィル設計を行います。

②BIMによる3Dを用いて、内外装デザインのCGやVR(動画)、各シミュレーション(地震、降雨、景観、環境など)を作成し、すべての関係者が計画を共有できるようにします。

③意匠・構造・設備・外構・仮設などの設計データをBIMで統合、精度と品質を高めます。

④コストコントロールに関わるスケルトン・ボリュームチェックにおいてBIMを活用することで、スピー

ディな検討と方向性誘導が可能になります。

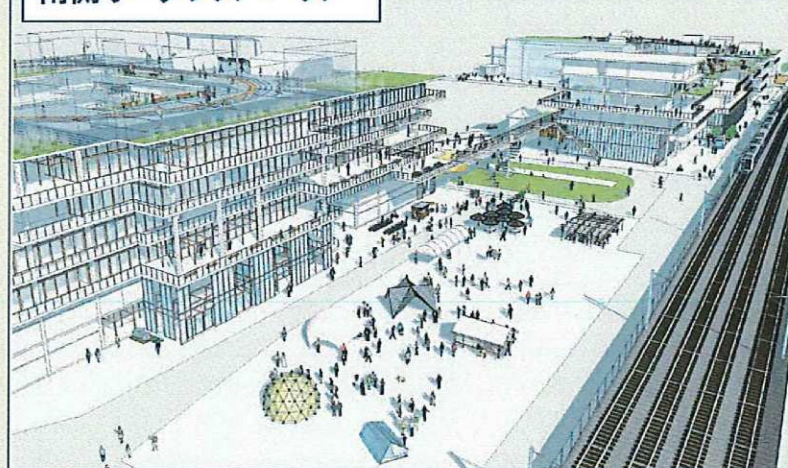
⑤各フェーズに行う各シミュレーションは、めざすべき環境性能を明確化し、合理的なスケルトンボリュームの設定やファサードデザインに活用することができます。

⑥BIMによる長寿命化計画——維持管理への活用
施設管理情報をBIMデータに取り込み、携帯端末などを用いて人手をかけずにファシリティマネジメントを可能にするシステムを提案します。環境制御システム(温湿度、CO₂、照度)と連動させ、きめ細やかで、フレキシブルに快適な居住域環境を創り出すとともに、ランニングコストやライフサイクルコストを低減します。[図E]

コスト縮減の手法

機能・性能を維持しつつ、さまざまな技術的視点から、コスト縮減を図ります。[図F]

南側オープンスペース



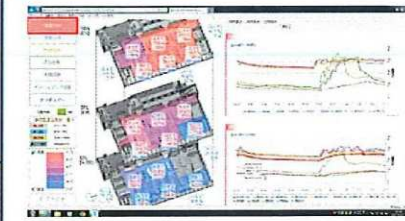
[図C] スケジュールコントロール



[図D] 課題解決のプロセス



[図E] BIM長寿命化システム



[図F] コスト縮減

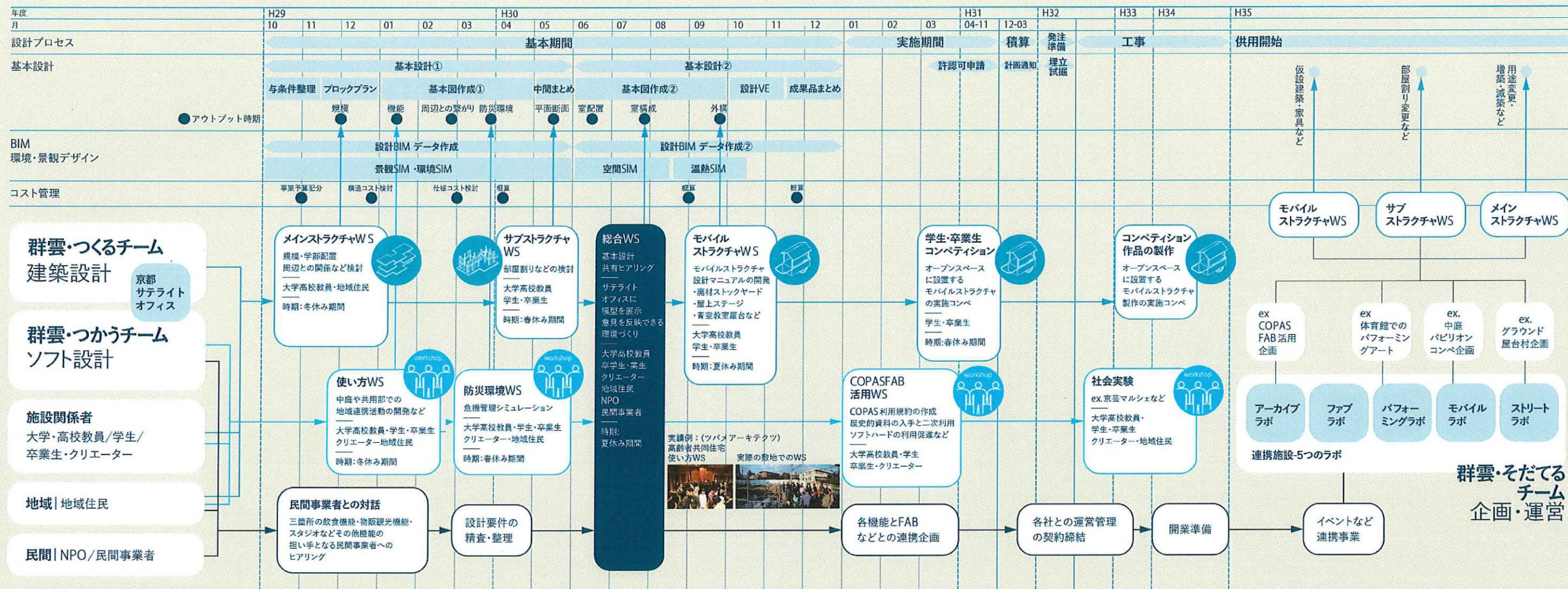




群雲テラスはこうして実現する

第8号様式

6/6



1 つくる・つかう・そだてるチーム

群雲テラスを実現するために、つくる(建築設計)・つかう(ソフト設計)チームが、順次ワークショップを仕掛けていきます。施設関係者、地域住民、民間事業者など多様な主体の声を聞きながら、設計をしていきます。京都サテライトオフィスを構え、プロジェクトに取り組み、建物竣工後も、設計時に関わったメンバーがそだてるチーム(企画・運営室)として残ります。短期的な取り組みとして様々な企画を行い、長期的には建物の用途変更や増改築までも、ワークショップを行いながら展開し、大学を育てていきます。

2 ワークショップ(WS)とBIMのハイブリッドプロセス

つくるチームが仕掛けるワークショップには主に三種類あります。

- **メインストラクチャワークショップ** | 規模・学部配置との関係など検討し、大学教員や地域住民を対象とします。
- **サブストラクチャワークショップ** | 部屋割りなどの検討を行い、大学高校の教員や、学生・卒業生を対象とします。
- **モバイルストラクチャ** | 部屋割りなどの検討を行い、大学高校の教員や、学生・卒業生を対象とします。

象とします。合わせて、実施設計中や工事中も学生や卒業生クリエイターを対象とした、コンペティションを行い、キャンパス内に活気を与えていきます。さらに、つかうチームがソフト部分におけるワークショップを仕掛けていきます。

- **使い方ワークショップ**
- **防災環境ワークショップ**
- **COPASFAB活用ワークショップ**
- **社会実験**

などのワークショップを組み合わせることで多様な主体の参加を促し、小さな声までを全

て広い、そこから得た知見をBIMを介してリアルタイムに設計に反映して検証していきます。このようなプロセスを通して、まさに群雲とも言えるべきアイデアの凝縮した建築の実現を目指します。ワークショップは春休み、夏休み、GW、文化祭、冬休みなどの期間に集中して行いたいと思います。

3 民間事業者との対話

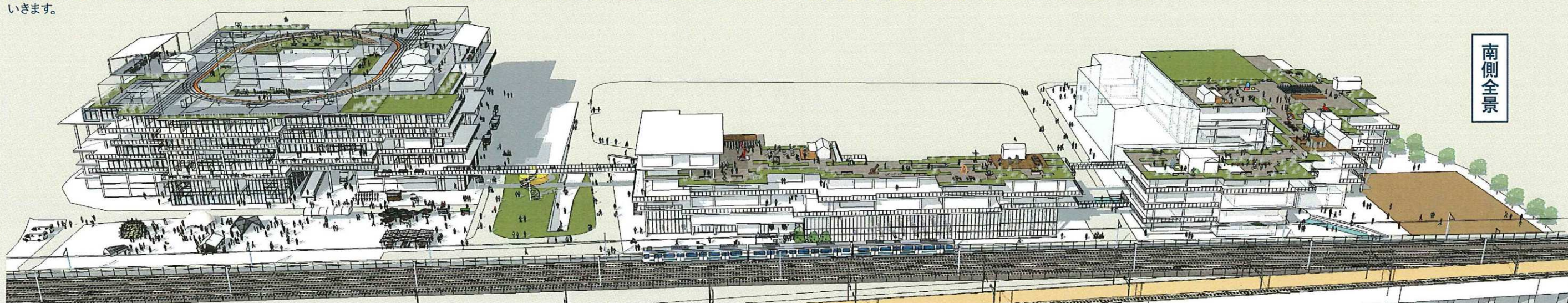
ワークショップの進行と同時に、FABや飲食機能・物販観光機能・スタジオの担い手となる民間事業者へのヒアリングを行います。店

舗部分だけでなく、中庭や屋上にまで活気が展開・持続していくように仕掛けていきます。

4 竣工後も関わり、大学をそだてるチーム

設計時に関わったメンバーや、設計中に発掘された人材を運営メンバーに据え、「そだてるチーム」(企画・運営室)として大学に残ります。設計プロセスで得た経験・知見を生かし、大学施設を積極的に活用していきます。民間事業者や、大学内に計画している5つのラボと連携していきます。

- **アーカイブラボ** | 過去作品の創造的利活用
 - **ファブラボ** | ラーニングコモンズと一体化
 - **パフォーミングラボ** | 多様な表現の場の提供
 - **モバイルラボ** | 学内外での仮設展示・研修
 - **ストリートラボ** | 中庭での地域連携活動促進
- さらに、必要に応じてワークショップを行い、モバイルストラクチャの実施、サブストラクチャの変更、さらには、用途変更や増改築にまで及ぶメインストラクチャの更新にも携わります。このように様々なタイムスケールで関わることで、未来の社会にも対応していくような、大学・地域一体となった群雲を育てていきます。



南側全景